退任教授のご紹介

退任にあたって

京都大学大学院医学研究科附属総合解剖センター
教授　竹林　浩秀

2024年４月に京都大学に着任し、クロスアポイントメントを認めていただいておりましたが、このたび、2025年８月末をもって新潟大学医学部神経解剖学分野教授を退任いたしました。約14年にわたりお世話になった新潟大学には、深い感謝の気持ちでいっぱいです。学友会誌への寄稿は、新任のご挨拶（第50号）、学生時代のこと（第55号）に続き３回目となります。退任にあたり、何を書くか悩みましたが、やはり未来を担う学生さんたちへのメッセージを贈りたいと思います。

まず、新潟大学は、たいへん素晴らしい大学です。楽しく有意義な学生生活を送り、大きな自信と深い愛着をもって卒業していただきたいと考えています。新潟大学での教員生活を振り返りながら、プロフェッショナルとなる準備期間である学生時代を過ごすためのアドバイスを３つ述べさせていただきます。

１）同級生や同窓生との「つながり」を大切にしてください。新潟大学は長い伝統を持ち、同窓生は日本のみならず海外にもおられます。困ったときには、きっと力になってくれるはずです。特に、少し離れた期間があってもすぐに打ち解けられるのが同級生です。私は医学研究実習などで配属された学生さんに、学生時代の６年間で同級生全員と話すのがよいとアドバイスしていました。また、留年した学生さんには「同級生が２倍になるのはメリットである。ただし、３倍、４倍にはしなくても良い」と冗談交じりで伝えていました。私自身、新潟大学医学部で京都大学の同級生である平島正則教授（薬理学）、西山慶教授（救急医学）と同時期に勤務するという経験をしました。出身以外の大学で同級生が３名集まるのは珍しいことですが、心強く、楽しい時間を過ごすことができました。この経験からも、人のつながりの大切さを実感しています。

２）変化を楽しみながら受け入れ、対話力を磨いてください。近年、医学・医療

の知識と技術は飛躍的に発展しており、そこにデジタル技術の進歩が加わって、変化の速度はいっそう増しています。我々の学生時代は携帯電話もインターネットも普及しておらず、のんびりしたものでしたが、今やスマホは一人一台が当たり前、生成AIも実用化され、デジタル技術の進化は今後さらに加速するでしょう。これからの時代は、変化を楽しみながら受け入れ、正しく活用する姿勢（適応力、柔軟性、倫理観）が強く求められます。一方で、デジタル化が進むほど、人対人のコミュニケーション力は一層求められていきます。コミュニケーションに苦手意識を持つ方もいるかもしれませんが、それは経験を積むことによって必ず育っていきます。ぜひ、多くの人との対話を通して多様な考え方を理解し、一人一人が共存・共栄する社会を、身近なコミュニティーからより大きなレベルまで目指してください。（もちろん、実現は簡単ではありませんが、目標とすることは重要です。）

3）自身の特性を見極め、「ノブレス・オブリージュ」を胸に社会に貢献してください。解剖学を教えていると実感しますが、人間の体はそんなに早く進化しません。これからも人々はさまざまな健康問題に直面することもあるでしょう。だからこそ、医師や医学研究者の役割は、さまざまな形で常に求められます。医学生にもいろいろな性格・能力・特性の人がいます。自身の強みを見極め、将来の道を選択してほしいと願っています。そして、仕事を選択し実践する際には、「ノブレス・オブリージュ」という言葉を思い出してください。皆さんが医学を学び、医師、医学研究者として活躍できるのは、自身の努力に加え、様々な「幸運」が重なった結果でもあります。その「幸運」に感謝の気持ちをもち、自身の能力を社会のために生かし還元するという視点を忘れないでください。新潟大学医学部の学生さんは、地域特性もあると思いますが、気がやさしく、バランスの取れた方が多い印象を持っています。先生方にもそのような尊敬すべき方が多かったと感じています。

新潟で過ごした約14年間には、多くの思い出があり書ききれませんが、一言で言えば「人に恵まれた」期間でした。新潟を去る際に、直接お伝えしきれなかった皆様にも、この場を借りて心より御礼申しあげます。もし、どこかで私をお見かけになりましたら、お声掛けいただけると嬉しく思います。皆様のご活躍と、新潟大学のさらなる発展を心より祈念しております。